

# 帰国後生まれた親子の コミュニケーション

私たちはカンボジアという異国の地で様々なものを見て感じた。この貴重な経験を職員と子どもへ伝えることが大切なミッションのひとつであった。

職員の皆様には、海外研修を少しでも疑似体験してもらいたいと本日の企画を練った。

子どもたちへは、ゲームや現地のフルーツを体験してもらったり、対話しながらじっくり話をしたり、遊びの延長の中に取り入れられたり、各園で趣向を凝らして伝えた。今でも世界地図を見てカンボジアを指差す子どもたち。世界に興味を持つきっかけとなれば嬉しい。また、井の頭ではエントランスにたくさん写真を飾った。その写真を見て子どもが家族と話す、そんな親子のコミュニケーションが生まれる瞬間も見ることができた。

海外での経験を伝える、これが海外研修のゴールではない。この研修で生まれた横の繋がりを今後のケンバに活かしていければと思う。まだ第一歩を踏み出したばかりだ。

ケンバ井の頭 工藤綾子



# 人との関わり

私はこの海外研修に参加をして人と関わる事の楽しさを経験しました。

研修前、クラスの子と私たちと平坂名のあいうえおカードを作りました。年長の子と私たちは、知らない国のお友だちにプレゼントという事でワクワクしながら作っている様子でした。保護者の皆様には、「気をつけて行ってきて下さい」と声を掛けて下さいました。研修に行く事を知り、クラスの保護者の中では治安や食事の問題なども調べて下さる方もいるところでも嬉しく思いました。研修前には顔見知り程度の先生方と一週間も大丈夫かなあと心配でしたが、空港から会話は



絶えず、飛行機やホテルでもそれぞれの園の話やプライベートの話をしたり、少しずつ打ち解ける事が出来ました。準備をしてきたひらがなカードでかるたをする前日にはメンバーで意見を出し合い、ボジションなどを決めて当日には「毎日このメンバーで保育しているみたい」と思っほどの7人の動きで、かるたをしている時は思いませんでしたが改めて考えると、前日の打ち合わせから当日のかるたまでの関わりが重要で成功したんだなあと感じています。

帰国後、年長クラスの子と私たち写真と動画を見せて報告しました。同じ年齢の子と違う国にいて、どんな服を着て、どんな食事をしてどんな言葉なのか、興味を持ち質問責めでした。家庭では「汚い水を飲んでるんだって」と、話をした子どもが沢山いました。

研修メンバーではもちろんのこと、子ども、保護者、ご家庭で関わりが次から次へと繋がりとでも嬉しかったです。この経験を生かし、スポーツフェスティバルや発表会前には子どもたちに「なにやりたい?」と相談をして家庭でも保護者の方と話すという関わりが自然と流れなくなっています。

保育者同士の関わりもさらに増やしさらに良い環境を目指していきます。

ケンバ高田 水越めぐみ



～すべての人に感謝～



# カンボジアに潜む影

アンコールワットが建設されたと言われるアンコール王朝時代は9世紀から数世代にわたりつづいてきた。そして、1975年から1979年の4年間、ポル・ポト独裁政権時代があり、知識を蓄え謀反を起こさぬよう、知識人と呼ばれる人々が次々と大虐殺された。その名残で今でもカンボジアには年配の層が極端に少なく、子ども達が極端に多い。

ガイドのテブットさんから話を伺った。知識人は政治の邪魔になってしまったため、良い仕事があると騙しては殺されたとの事だ。読み書きできる人は10%程だったが、その他の人々は強制的に工場などで働かされていた。ポルポト時代は1979年に終わったと言われているが、テブットさんが生まれた1981年もまだ大変な時代だったという。敗北を認めないポルポト派の残党はジャングルに逃げていき、たまに村にありてきては引き続き虐殺を繰り返していた。そのため人々は、食事は早く済ませ、防空壕のような場所に隠れてはポルポト派の襲撃を怠をひそめてやり過ごしたのである。

平和な日本から覗き見るカンボジアの闇は、想像を絶する出来事はかりである。

ケンバ若松河田 山口桜子







## 勉強か、物乞いか

近年、カンボジアでは観光バブル（観光客が増えている事）の影響により学校に行く事よりも、観光名所で物乞いをする子どもが増えている。

カンボジアに学校が無いわけではなく、まだ学校と教師の数が少なく、生徒数が圧倒的に多い。そのため、午前中に通うグループと午後に通うグループに分けられており、空いている時間に物乞いをする子どもも多い。

しかし、ガイドさんが語るには、学校に行っても教師一人が子ども達五十人、六十人に教えているため、授業に出ていても授業内容についていけない子どもも出てくる。それに通学手段がないなどの社会事情も手助けし、授業に出ず物乞いをする子が急増している。

国も、子ども達の物乞い状況を認知していない訳ではない。私達も実際に目撃したのだが、観光名所周辺にいた子ども達をバイクで追いかける警察の姿が見られた。今まで座って話していた子ども達も警察の姿を見るや否や、四方に散り姿を隠した。

ガイドさんに話を聞くと、子ども達は学校に通って勉強して良い職業に就くことよりも、物乞いをして、すぐに収入を得る方を選んでしまっただ。

子ども達にとっては、将来良い職業に就くことよりも、今を生きるために、物乞いをしてお金を得ることの方が、より切実な事実なのかもしれない。

ケンバ若松河田 荒井 陽



↓ 観光名所を見回る警察



↑ 観光名所で客がペットボトル等のゴミを落すの待つ子ども達

## みんなで子どもを育てる社会 保育概念が根付いていない幸せ

私たちが見たカンボジアには「保育」という概念がない。地域での子育てが根付いているのだ。

かものはシファクトリーを訪問した際も、保育スペースは設けられていたものの、専門職はおらず、そこにいる大人全体で子どもの面倒をみている様に感じた。

また、生活のために街に出稼ぎに出る両親も少なくない。子ども達は実家に預け、仕送りをして生計を立てている家庭もいる。家族、地域が協力しながら子どもを育てているのだ。それはまるで、戦後の日本と重なる部分が大さじょうに感じる。

社会の変化は家族のあり方にも影響を及ぼす。カンボジアに「保育」の概念が根付いていないのは、ある意味幸せなのかもしれない。「みんなで子どもを育てる社会」。それが理想の形、さらにはケンバの理念そのものなのかもしれない。

一方で、子どもたちが「金集め」のために利用されているのでは？という疑問が残る。旅行ツアーの一部として観光地化している孤児院。子どもたちの笑顔が本物だと信じたい。

ケンバ井の頭 三浦 彌生



## 良い教育を受けさせるために施設へ

カンボジアには、日本を始めとした様々な先進諸国が、だるま園のような施設を支援している。子どもたちが施設に預けられる理由は様々だが、中には「良い教育を受けさせるために」預けられている子どももいる。

みんなとても元気で、創造力豊かに遊ぶことも上手な子ども達だった。いつもではないかもしれないが、ほとんど施設のスタッフらしき人はいない中、子どもたちは、勉強をしたり、学校へ行ったり、遊んだり自由に生活をしているように感じた。

しかし「ママ」と呼ばれている施設

ケンバ西馬込 武田 幸子



## 生き抜く事、子どもを守る事。 それがすべてだ。

カンボジアは1991年の内戦締結に至るまで、まさに暗黒時代と言える状況にあった。内戦における、ポル・ポト政権下での多くの知識人弾圧及び虐殺が生み出した問題は、現代にも大きく爪痕を残している。その状況から約23年過ぎた今でも、都市部と農村部との貧困の格差は大きく、警察は賄賂でルールを簡単に捻じ曲げてしまつ。しかしそこで暮らす人々は、その権力者が牛耳る社会の中であつても、日々を全力で生きている。

観光名所では物乞いをする子どもたちがいる。ガイドは物乞いをする子どもたちに、憐れみを掛ける必要は無いと語った。それは子どもたちの墮落を心配しての事だった。人間は誰しもが案な道に流されてしまつもので、カンボジアでも同じことである。日々の貧困にあえぎ、親の期待を他所に自分はずかでも賞金を得て、理解できない勉強から目を背け、目の前の食べ物などの為に物乞いをしていると言つたのだ。それは未来の放棄に他ならない行為であり、学びの放棄によって豊かな未来の扉が閉ざされてしまつたのである。

経済的な問題で事実上自力では立ち行かない状態にあるカンボジアは、海外からの支援で観光名所の新規開発・維持・運営を行っている。海外から「支援」と言いつの「侵略」を受けながらも、未来を生きる事に真剣に向き合っている現状があつた。日々生き抜く為に現実問題としてお金を求める一方、勉強による豊かな人生を夢見、ある種の適当さを持ちながら、より強く豊かになる為に知識を求める人々がカンボジアでは今、生きている。ガイドは語る。子どものためならば喜んで命をなげうち子どもを「守る」と。子ども達を学校に通わせ、知識を得てより良い未来を生かさせる事が幸せだと。カンボジアでも子どもたちは未来であり、宝なのだ。

ケンバ高田 夏秋 賢

